

S E 板廊下を歩く足音

千歌（M）「それから数日経った頃、叔母様が御坊さんを連れて家に来た。私は障子越しに、耳を澄ました」

了誓「あの辺りは古来より木曾川の主、八大竜王の喉口に当たるとの言い伝え。よって川をしめきらんとするのは竜神様の喉を塞がんとするも同然。その怒りにふれて、大雨、大風となるは必定^{ひつじょう}」

伝右衛門「やはりそうであったか………しかしそれでは、なにもできぬではないか」

叔母「いや、あるんだよ、あるんだ、できることが。ねえ、御坊さん」

了誓「竜神様に手厚く祈りを捧げなさい。その上で、仕事にかかればよい」

伝右衛門「手厚く、というと？」

叔母「人柱だよ」

伝右衛門「人柱？　なんだって！」

叔母「ねえ、御坊さん」

了誓「言ったろう。竜神様の喉口にふれてはならぬと。それでも造作を続けるというなら、それ相応の代償が要る」

叔母「そうそう、竜神様の怒りを鎮めるには、人柱しかあるまいて」

伝右衛門「しかし本当に、本当にそれで雨が鎮まるのか」

叔母「鎮まる鎮まる。ねえ、御坊さん」
了誓「信じぬなら信じぬでもよい。その代わり、川普請がうまくゆかねば、はてさて、ここにおられるみな様は、どうなりますか
……」

伝右衛門「それは……みきは、どう思う？」

みき「あたしや神かみほとけ仏の功德など信じませぬ
ゆえ、わかりかねます。ただ、人柱なんぞ、誰がその役をかってくれましようや」

叔母「与三兵衛がおるやないか」

みき「与三を？」

叔母「あやつは天涯孤独の身。伝右衛門さん、